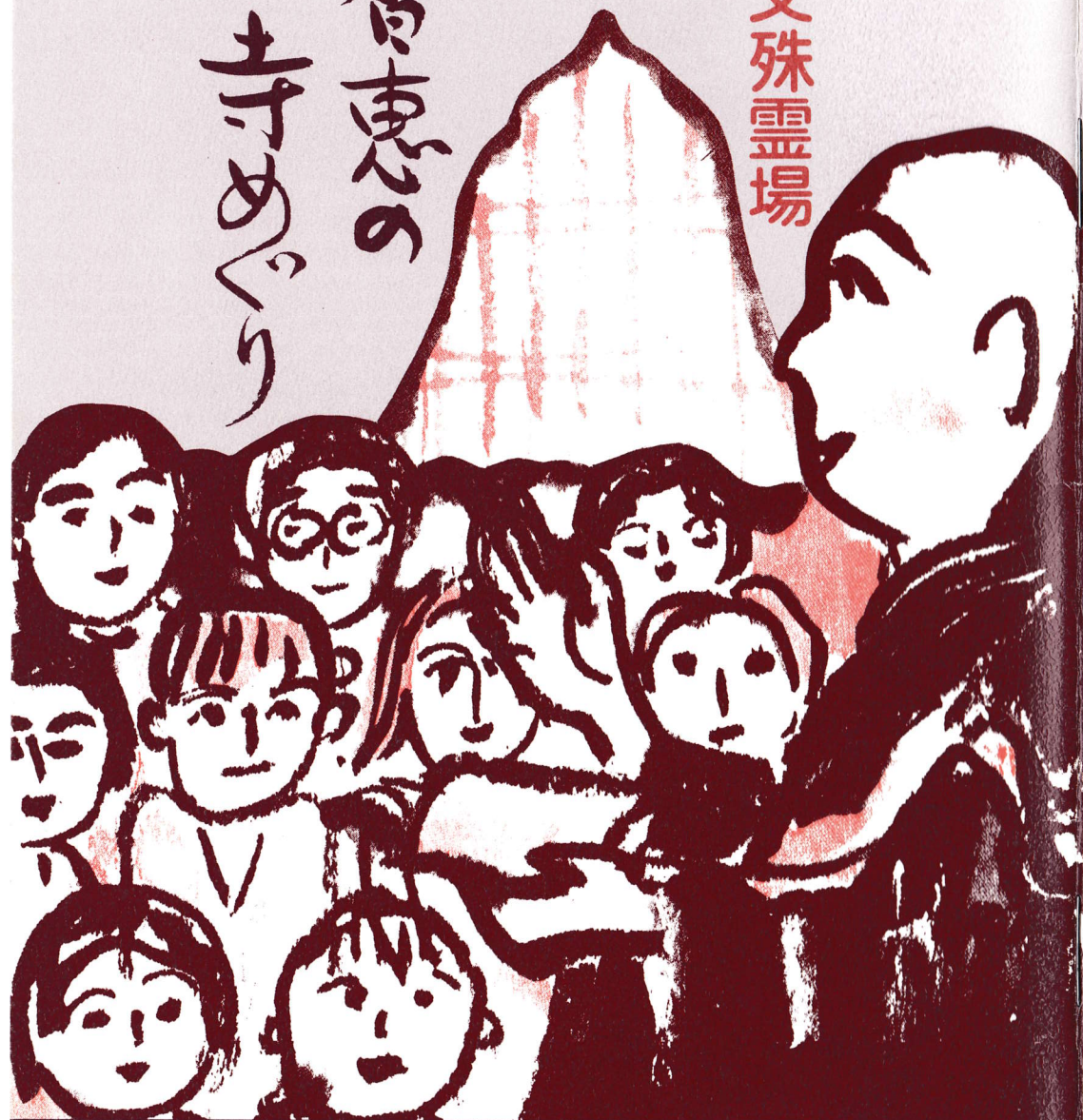


京都文殊霊場

知恵の

寺めぐり



かしこくなかったら

生きていけない

やさしくなれなかったら

生きている資格がない

心の眼を開かせる

文殊霊場めぐり

人生の智恵さずけます



善財童子

●お問い合わせは_____

京都文殊霊場

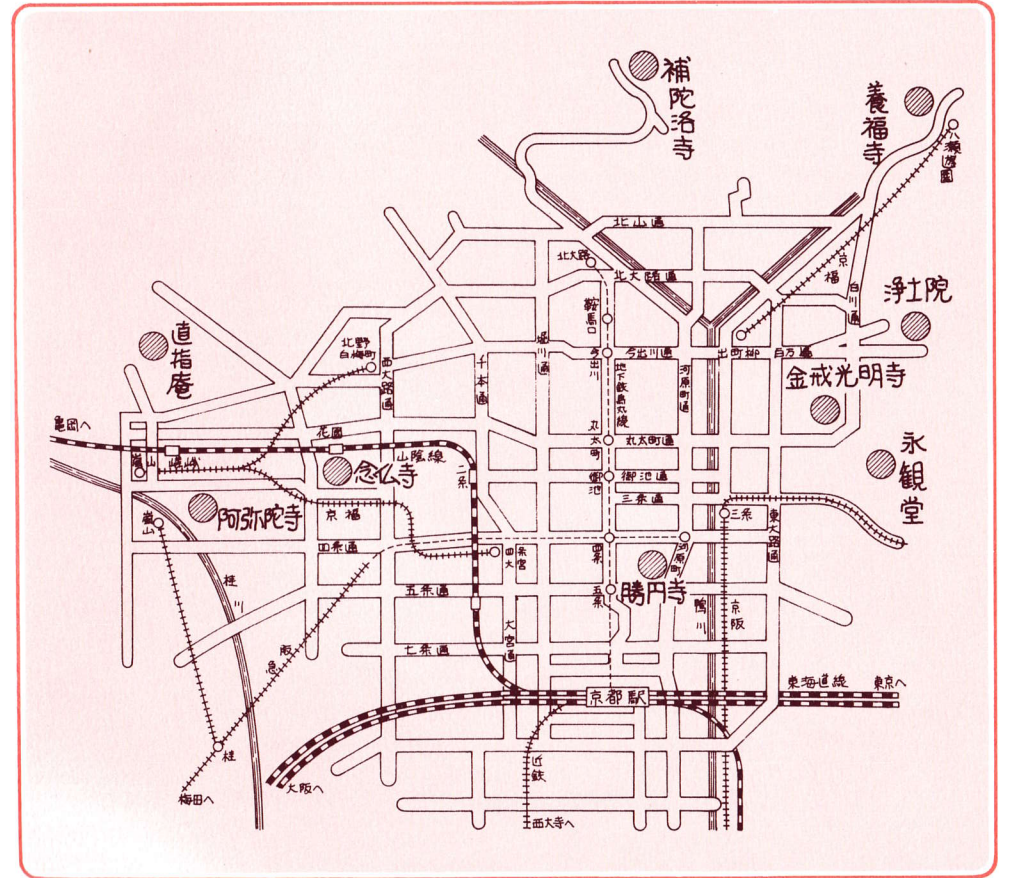
事務局 〒606 京都市左京区銀閣寺町浄土院

☎ (075) 771-5158

金戒光明寺
養福寺
阿弥陀寺

永観堂
補陀洛寺
安井念仏寺

浄土院
直指庵寺
勝円寺



京都文殊霊場



金戒光明寺の文殊さま

高麗門を入って東進し、三門前を通り、石塀につきあたって右折しますと、蓮池（兜の池）に架っている石橋（極楽橋）があります。

この橋に向ってはるか正面何十段の最上方に、厳然とそびえる三重の塔が、この寺の文殊塔です。往古は中山宝幢寺の本尊でしたが、同寺が廢寺になり当山の方丈に遷され、寛永十年豊永堅斎が徳川秀忠公菩提のために塔を建て、その本尊としたものであります。

塔の高さは五丈三尺余（約十六メートル）、国の重要文化財に指定されております。塔の眺望は東山山麓、蹴上からが最も勝れ、晴天遠く晴れた洛北の連峰を背景に、黒谷山のふもとにくつきり浮び上った風情は絶讃に値します。

本尊の文殊菩薩とその脇士の御像は運慶の作、丹後の天の橋立の切戸文殊、大和安部の安部文殊と共に、日本三文殊といわれ、この寺の文殊はその随一と申されております。

文殊さまのお姿は、頭に五髻（五つのもどり）右手に宝剣、左手に蓮華をもたれ、大きな獅子の上にお坐りになり、白雲に乗って今しも衆生済度の旅立ちをなさろうとする雄大な構想です。お顔は慈愛にみちた微笑の童顔、私達に愛語を語りかけて下さる風情です。

「三人よれば文殊の智恵」と申します。

文殊さまは「よい智恵」の持ち主です。

私達が文殊さまを拝みますと、私達の心をくみとって、直ぐに「よい智恵」を授けていただけます。

文殊さまの「よい智恵」とは何でしょうか。

世間では「智恵のある人」「伶俐者」とは「何でも知っている人」「頭の中になんでもつめこんでいる人」と考えますが、それは間違いです。

本當の智恵とは「智恵のひらめき」のことです。

一つの事が正しく判りますと、次から次によいひらめきが生れます。

例えば「仲よくする事はよい事だ」と気がつきますと、兄弟とも友達とも仲よしになり、目上の人を敬い、目下の人を助けると言った工合に、次ぎ次ぎによい智恵が湧いて来ます。

目次

金戒光明寺	6
永観堂禅林寺	8
大文字寺浄土院	10
あかもん養福寺	12
こまちでら補陀洛寺	14
直指庵	16
阿弥陀寺	18
安井念仏寺	20
ながでら勝円寺	22
おみやげ	24
各寺の所在地	25
編集後記	28
文殊菩薩とは…?	29

ですから文殊さまを拝みますと、文殊さまはつねにこの「智恵のひらめき」を授けていただけです。法然上人は幼名を勢至丸と申しました。九歳の時父に死別し、叔父の観学さまの許で育てられました。が、十五歳の春比叡山の源光さまに弟子入りすることになりました。その時観学さまから源光さまに添えた送り状には「進上文殊像一体（文殊の像を一体さし上げます）」と書かれてありました。勢至丸を迎えた源光さまが「文殊像はどこにある」と尋ねましたが文殊像はありません。そこで源光さまは、この小僧が文殊の様な智者だと気がついたと申します。一を聞いて十を悟る程の勢至丸も、「文殊の智恵」の持ち主でした。この勢至丸はやがて「法然上人」と仰がれ、日本の民衆に尊い念仏の教えを宣布された大上人です。皆さんも文殊さまや法然上人を尊み、よい智恵を頂き、立派な人になって下さい。

南無帰依仏

紫雲山

金戒光明寺

重文・文殊堂 左京区黒谷町 〇七五 七五二―一四二八
市バス・岡崎道下車 七七一―二二〇四



南無帰依仏

「南無帰依仏」とは「み仏をうやまい、その教を守り、身も心も仏にさ、げます」との心で、浄土宗の「南無阿彌陀仏」と同じです。「南無帰依仏」は略して「南無仏」でもよろしいのです。「南無仏」の説明をするに当って、私はお釈迦さまのお悟りを開かれた時の事を思い出しました。

お釈迦さまがお悟りを開く瞬間の事です。
金剛宝座に坐り「悟りを開くまでは此の座をたたない」と決意を堅め、瞑想は始まります。

瞑想は長く続きましたが、その間釈尊は両手を膝の上に組んでおられました。やがてある感動が湧き、両手を静かに胸の上にあげ、合掌して「南無仏」と申されました。

これが釈尊の宿願であった。悟りの開けた瞬間であり、同時に生身の釈尊が「仏」となられた瞬間であります。

合掌して南無仏と申された心は、何でありましょう。
釈尊はこの瞬間に天地間の真理を悟り、天地間のお蔭（縁起とも呼ぶ）に気づかれたのです。

そしてこのお蔭に感謝し、合掌して南無仏と申されたのです。そしてこの「南無仏」と申された悟りの内容こそ、仏教の根幹であり、天地を貫く真理であったのです。

長い釈尊の瞑想の中を去来したものは、何であったでありましょう。

六年間のウルビラの林の苦行は辛かった。然し六年の露命を

支えてくれたものは何であった。そこには新鮮な空気が、新鮮な水があった。乏しかったが木の実、茎の实の食事があった。樹の葉、草の葉も衣類の役立ちをしてくれた。屍体や骨の散らばる墓場を宿としたが、夜露をしのぐよすがはあった。

山を降りた直後、尼蓮禪河（にれんぜんが）の流れは、垢を洗い、汚れた身を清めてくれた。河辺に倒れ臥した際、通りすがった村長の娘スチャーターさん（スチャーター）から捧げられた新鮮な牛乳の味は生涯忘れられないであり、ピツバラ樹は天蓋（てんがい）のようであり、柔かな草は咲き乱れ、小鳥のさえずりも楽しそうである。

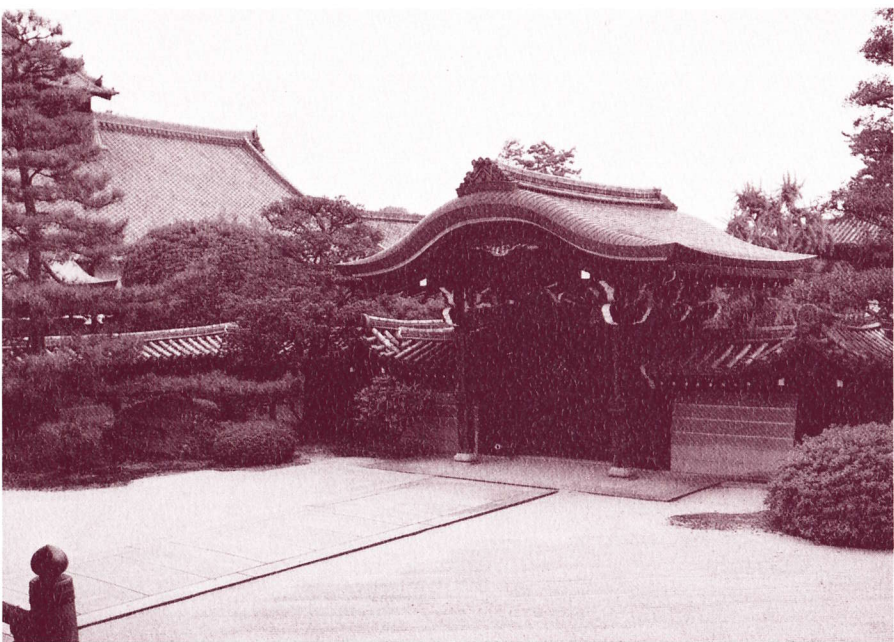
総ては天地に充ち満ちたお蔭の集りであり、恵みの一縁一縁である。

天地間の生きとし生ける者は、総てこのもちつもたれつのお蔭の中に生かされてある。

この事実気づいた瞬間に釈尊の悟りは開け、思わず合掌して「南無仏」と申されたのであります。

南無仏とは南無帰依仏であり、南無阿彌陀仏であったのであります。

天地の尊さにめざめ、世間の有難さに気がつく時、私共はいつでもどこでも「南無帰依仏」と唱えながら、お蔭と喜び有難く働かせて頂く、本当の信仰生活に入るのであります。



南無帰依法

聖衆来迎山 総本山

永観堂 禅林寺

左京区永観堂町48 ☎(0)七五七六一一〇〇〇七
市バス⑤②⑦永観堂前下車 七七一一二四四八



南無帰依法と文殊菩薩さま

洛東 永観堂・禅林寺

この寺は、浄土宗の一派・西山禅林寺派の総本山で、ただしくは聖衆来迎山・禅林寺と申します。しかしながら、禅林寺という名よりは、永観堂という名で、世に広く知られています。この本山の中、釈迦堂に文殊菩薩さまは祀られています。

さて、この寺は、京都文殊霊場の中にあつて、南無帰依法——釈尊(おしやかさま)の説かれた教法(みおしえ)に、心から帰依します——という実践徳目が、配せられていますので、この徳目にそつて、文殊さまが私たちにとって、どんな菩薩さまであるかをご紹介します。

そこで、浄土宗を開かれた法然上人のお言葉に、それを伺つてまいりますと——

(ある人の問)「浄土(さとりの世界)へ生まれた者が、その縁が尽きたからといって、再びこの世(まよいの世界)に生まれ来ることは、あり得るのでしょうか。」

(法然上人の答)「ひとたび浄土に生まれたなら、もう二度とこの世に生まれ来ることは、ありません。だれもが等しく仏となるのです。ただし、人を浄土に導くために、この世に戻つて来る場合があります。しかしそれは、あくまでも人を導くためであつて、縁が尽きるというのでは、決してありません。」

この答にある浄土に導くために、この世に戻つてくる方——これが菩薩さまなのです。本来は、仏さまと同じ正覚(おさとり)

をひらきながら、人を救うことに全使命を感じ、身は菩薩という修行僧のいでたちで、浄土とこの世との間を幾度となく往復し、最後の一人を浄土に導き入れたあと、自身も浄土に定住し、仏に

「衣装替え」される方——これが菩薩さまです。

人を救う——これは、あなたもお医者さまが、色々な専門の科を設けて、科別に診断・治療されるように、人ひとり一人、その対処方は異なります。Aの人にはAの用に、Bの人にはBの用に、Cの人にはC……といった具合に。

丁度それと同じように、私たちの苦しみや悩みや願いごとを、菩薩さまも「専門」を設けて、救いまた聞きとどけて下さいます。ある菩薩さまは慈悲という立場から、ある菩薩さまは行という立場を標榜して、またある菩薩さまは智慧という立場を高揚して、そのみ許へやって来る人々をお救いになるのです。

この智慧の立場を高く掲げて、人々をお救いになる菩薩さま——これが文殊菩薩さまです。文殊さまは、ご自身の智慧を完成させるに当つて、「私に思いを寄せる者があれば、それはだれであろうと、私は、その者の希望(のぞみ)をかなえずにはおかない」という願をお立てになつています。

私たちが、文殊さまの智慧を授かることができるのは、この願に依るからなのです。しかも文殊さまは、最後の一人を救いとするまでは、浄土とこの世を幾度となく往復して下さる菩薩さまですから、人類が生存する限り、文殊さまは、いつも私たちの側にいて下さいます。

このことを心に留め、虚心(無心)に文殊さまに手をお合わせ下さい。これが南無帰依法ということでもあるのです。そうすれば、きっと文殊さまは希望(のぞみ)をかなえて下さるでしょう。



忍ぶ寝も声なかりけり
ほととぎす

こや禅かなる林なるらん

「新捨遣」永観律師

南無帰依僧

清泰山

大文字寺浄土院

左京区銀閣寺町30番(〇七五七七一―五二五八)
市バス・銀閣寺道下車東へ



僧に帰依する

この寺の担当は、三宝(仏・法・僧)の僧です。僧とは坊さんのことではなく、インド語でサンガ 和合衆 と言うことです。和は口と音符禾(くわえる+加)とからなり、人の声に合わせ応じる。ひいては心を合わせ「やわらぐ」の意を表わします。和とは、むつまじいこと、「人の和」、なかなかおりの「和解」「和を結ぶ」、二つ以上の数を加えた値い、等のこと。

和合とは統一のとれた・共同せる・調和した、と言うこと。和合衆とは一つの目的に向かって協力して進む人びとの集まり。

(その成員は普通三人中。村元先生によれば、五人以上とする)。従って、同じ目的に向かって志しを同じうする者の集まりのことです。

丁度、この寺の記念品「幸せのリング」がこれを現わしています。

南無とは発願帰命の意味。仏・菩薩の名前、または経文について絶対的信頼を表わす言葉。まごころを込めて、仏や三宝に帰依随順して信を捧げること。

帰依とは仏を信仰してすごること。

僧は互いに調和して行くこと。

お釈迦さまの「法句経」に、

花びらの色と香りをそこなわず

ただ蜜味(あじ)のみをたづさえて

彼の蜂の飛び去る如く

人々の住む村々に

かく聖は歩めかし

いろいろな美しい花が咲きますと、蛇が飛んできています、蜂が飛んで来ます。そして、皆この花に集まります。「何の為に蝶や蜂が花に集まるのか」と言いますと、勿論この花の蜜が欲しいからです。花の奥の方に深くしまつており、その蜜を戴こうと思うと、花びらへ止まつただけでは蜜は取れません。中へ入って行かなければなりません。そして開いておられます花の芯髓まで、この蜂は入って行きます。

そして、その入りかたは、乱暴な入り方は致しません。本当に慎重しく、そつと入って、戴くだけ戴きます。精一杯花の蜜を戴いて、そつとまた後ろを向いて出て行きます。蜂に一番感心することは、中へ入ったら今度は出る時に花びらを傷つけないように出て行くのです。

そして、出る時に体へ花粉を一杯着けて出てきます。蜜を貰った代わりに、花粉を体へ一杯塗り付けて、そして隣へ行って、この花粉を向こうの花へとくつつけて来ます。これが仲人の役です。花から言ったら、「入ってもうて有難う」。それがなかつたら結婚出来ません。花が結婚出来るのは、蜂が入ってくれるお蔭です。

自然の中の営みは、美しいですね。お互いに損なわない、大法の現われです。頂戴致しました、有難うございました。そういう気持ちで、蜂は花びらの色と香りを損なわず、ただ蜜味さえ貰うたらしいのです。花は蜂によって、蜂は花によって調和しております。そういう自然の調和の営みが、「僧」の意味です。

それを私達に花と蜂とによって見せて下さる仏の心と言うものは、何ともいえません。そう言えば実は蜂も仏なんです。花も仏なんです。と言う事が解かったならば、人の住む村々に、かくの如く聖は歩めかし。法の解かった人を聖と言います。仏法に気付いた人を聖と言います。聖に、私もあなたも簡単になれます。今すぐにもなれます。それはいけないことをいけないことであると知っている人。非を知るから非知り。

聖とはそんな難しい人を言うものではありません。

我々も今日ここで、「これは正しい」「これは間違っている」と言う、この分別が出来たら、その日から聖です。法の解かった人は、蜂が相手を損なわないように、人生を生きる在りかたは、波風を起こさないように生きます。

それを厄介かけておりながら、後から悪口を言う。それはどうせ気に入らん処も在りましょうけれども、蜂をこらんさい。蜂は何一つ不足を言いません。「この花は蜜が少ない、花びらなと破つてやれ」とは申しません。お釈迦さまはそこをおっしゃった。大勢の人が住んでいる処の村、そこには少なくとも法の解かった人は蜂の様に生きます。相手を損なわぬように、貰うだけ貰ったら、せめてお礼をして帰りましょう。それが調和です。そういう風に聖は歩めり。こう言う風に生きなさいよ、と言っておられます。

これ一つ読んだだけで、皆さん方は、僧の世界と言うものが解かって下さったと思うのであります。

あかもん 養福寺

左京区八瀬野瀬町48 ☎(0七五)七二一八五七五(代)
京福電車・市バス・京都バス・八瀬遊園下車



布施

よろこんであたえる人間となろう

物があれば物を

力があれば力を

知識があれば知識を

みんなにあたえよう

なければ自分の中に育ててあたえよう

花は美しさを惜しまず

小鳥は楽しい歌を惜しまない

あたえるとき人間は豊かになり

惜しむとき命は貧しくなる

これは若者むきに「ほとけさまの教え」を示した一節です。

ここでは「施す」という言葉を「よろこんであたえる」と現

代的な言葉であらわしています。

施すと与えるでは少々ニュアンスが違います。与えるとは富

める者から貧しき者へ、目上の者から目下の者へ、親から子へ

と総て上下の関係のもとで行われるやりとりであり、それには

何か代償のようなものが期待されやすい行為です。

これに対して施すとは全く次元が異なったものでごく自然な形

で代償などは毛頭考えてもみない、そうしなくては行かない

ただたださせていただくことに徹した菩薩行ともいえるもので

あろうと思います。

「布施」といえば、僧に金品を施すことだと考えている方が

同時に自分の心をいつも落つかせ、安らかに保つよう努力する
ことも大切です。

一、**身施**(まめまめしく身体での施し)

一口で申せば今さかんなボランティア活動のように、からだで

親切なおこないをしてあげることです。

一、**牀座施**(座をゆずり合う施し)

乗ものなどで、おとしよりや身体の不自由な方、あるいは疲

れた方などに座席をゆずる施しです。

お釈迦さまは昔からこの実践行をすすめられています。

一、**房舎施**(休息の場などを気持よく提供する施し)

世知辛い昨今なかなかできないことですが、一夜の宿がなく

困っている方に家を提供する施しのことです。

多いと思います。間違っってはいません。これを正しくは財施と
いいます。これに対して僧がこの報いのため、読経をしたり仏
法を説きます。これを法施といえます。
私たちは施しといえば金品のみを考えますが、最も身近かに
何時でも、どこでも、だれにでも心がけひとつで実行できる施
しがあります。

『雑宝蔵経』に無財の七施について次のように説いています。

一、**眼施**(慈しみの眼をもつての施し)

相手に慈愛をこめた涼しい目元で接します。これが眼の施し
です。眼は口ほどにものをいい」と申しますように、眼は心持
ちをあらわします。

一、**和顔悦色施**(ほほえみの顔の施し)

私たちはとかく喜怒哀楽を顔にあらわしやすいのですが、怒
りだけはぐつとこらえて、相手にいい印象をあたえましょう。

一、**名言辞施**(愛情のこもった言葉の施し)

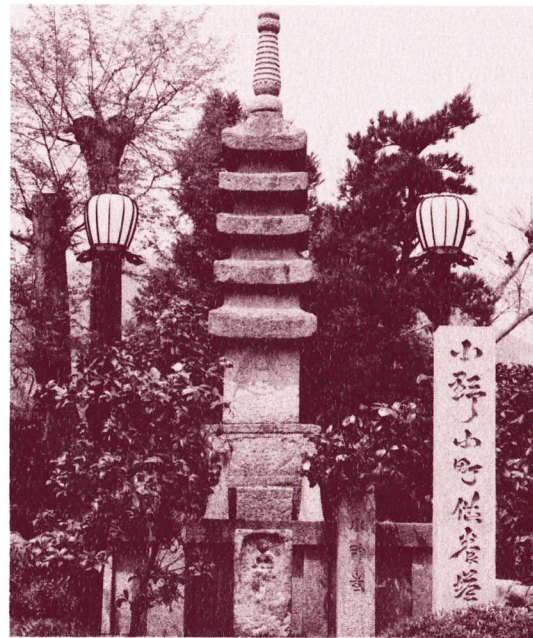
仏語に「和顔愛語」という言葉があります。和やかな顔はそ
れだけ人の心を和ませます。和やかな顔からやさしい言葉が生
れます。一つの言葉で相手をよろこばすこともでき、傷つける
こともあります。ほんとうの顔の美しさは、その人の人格を含
めた内なる美しさのあらわれであって、顔立ちの問題だけでは
ありません。

一、**心施**(思いやりのある心の施し)

相手の身になって考え、よろこびも悲しみも共に分かちあえる
心が必要です。



如意山

こまちでらふだらくじ補陀洛寺左京区静市市原二四一(一〇七五)七四一―三二八五
京都バス・静市・市原行き小町寺前下車

「自分を律する」というと厳しいようですがそんな厳しい意味でなく、私達はできるだけルールを守って行こうという気持ちがあります。これが「持戒波羅蜜」です。「持」は保つこと、もち続けることです。怠ったり、忘れないようにもち続ける。「戒」もあまり難しく考えずにきまりを守り自分をコントロールする願いでも申しましようか、電車の軌道の様なものです。あなたが外出なさる時には、どこへ行くという目的地があるでしょう。目的なしに出掛けるということは先ずありませんね。中にはどこというあてなしに歩く散歩もあるといいたい人もあるだろうが、その散歩にも、健康のためにか、時間つぶしにか、やはり、それはそれなりの目的はあります。

新大阪を出た新幹線も東京行、博多行と目的地に向かって走ります。速度も早いです、乗心地は快適です。さすが世界に誇る乗物だけのことはあります。然し、いくら、さすがといわれても、もう一つ大切なものを忘れてはなりません。それは、ルールです。即ち軌道であります。これなくては、如何に乗物が立派でも、その目的を果たすことは出来ません。軌道は地味で下部の存在だから、ともすると忘れがちですが、忘れてはならぬ大切なものです。乗物の車輪が、たとえ、僅かでも軌道から離れてご覧、忽ち立派な乗物も顛覆し、脱線せねばなりません。軌道を無視したなれば、すばらしい能力を備えていても、それを発揮することは出来ません。横倒しになった乗物ほど見られ

ぬものはない。立派であればある程、顛覆のざまは見られたものではありません。

このことは、人間生活にもそのまま、あてはまると思われまふ。此世に生まれ出た人間はいや応なしに、日々最終の目的地に向かって進みます。所が世の中にも道が具っていて、すべての人間は、この道を意識するとせぬとにかかわらず、踏まねばなりません。犬や猫は道でない所でも平気で歩きます。人間だけは目の前に目的地が見えていても道でない所は歩きません。遠まわりをしても、やはり、道を通ります。身体だけ道を通るのでなく、精神もまた道を通って日々生活するので、人間が万物の霊長と尊敬されるのであります。心の通る道、それを、道理ともいう、徳ともいうのですが、この道が、乗物に於ける軌道と同じように、この軌道を踏みはずしたり、無視したときは、どれほど地位が高くて、有力者でも、脱線、顛覆を免れることは出来ません。そういう制裁を受けねばならないのが世わたりのきびしさであります。

それは人間が作った法律などではなく、誰がどんなに弁護してものがれることの出来ない自然の法則であり、戒律であります。だから戒とは軌道であります。その軌道を正しく歩むのが持戒であります。



直 じぎ

指 し

庵 あん

右京区北嵯峨北ノ段 ☎(〇七五)八七二—一八八〇
市バス・京都バス大覚寺下車



忍辱(ニンニク)という言葉は、日常あまり使われない仏教語ですから、皆さんの中には、中国料理などに使われる、食べてくさい蒜(にんにく)を考える方もいらっしゃるかもしれませんが、そうではなく、忍辱とは、不平不満をいわずに辛抱して、堪え忍ぶということなのです。

忍辱の忍は、しのぶの意味で、「忍」という字は、「心」の上に「刃」を置く。そのように、心臓に刃をつきつけられても、堪え忍ぶ意味をあらわしているといわれています。

私たちの一生は、喜び勇む日々はいくたびかあろうけれども、それよりも苦しみ悩み、嘆く日々の方が、もっと多いようです。誰も好んで苦勞をしたいとは思っていない。ましてや、幼子の紅いほっぺたを見ていたら、お前にだけは苦勞はさせないよと、ほおずりしたくなるのも親の情です。だから、できることなら苦勞なしで過ごしたいと思うし、それで一生過ごせたら言うことはないのですが、そうはいかないのが人の世であり、人生なのです。

この世を「娑婆」といいます。これは、忍土、堪忍土と訳され、あらゆる四苦八苦を忍ぶ世界。つまり、人の世は、忍の心、堪忍の気持がなくては、一日も暮せない処という意味なのです。四苦八苦とは、生まれることも、老いることも、病気になることも、死ぬことも苦しみであり(生老病死苦)、愛している人と別れることも(愛別離苦)、愛していない者と会うことも(怨憎

会苦)、欲しいと思うものが手に入らないことも(求不得苦)、体と心に訪れる様々なことも(五陰盛苦)、全てが苦悩であるという事です。

すなわち、この世はもともと苦の世界であるから、楽をして生きようなどと考えること自体が間違いなのです。あらゆる苦難を堪え忍んでこそ生きる価値がある、と思わなくてはならないのです。

深い苦しみは、これを堪えることによって、いぶし銀のような光を放ち、私たち人間は、一つひとつ苦しみを乗り越えながら、強くなり、心豊かになっていくものなのです。

生活することは苦むことであり、苦むことは喜び楽しむことです。生活することは喜びや苦しみの繰り返しです。

辛抱し、堪え忍ぶとき、他の人の深い悲しみも察知できるようになり、無言のいたわりとはげましの心が、通い合うようになるはずです。

お釈迦さまは、「能く堪え忍び得る者は、有力な偉大な人物という」とお示し下さいました。

堪え忍ぶことを忘れ、わめきにわめいているような今日の世の中は、果たして人間の社会と言えるのであろうか……。



如意山

阿^あ弥^み陀^だ寺^じ右京区嵯峨野宮ノ元町76㉿(〇七五)八八一—二二一六
京福電車・市バス・京都バス・有栖川下車

精進は仏道

精進はシヨウジンと読みます。セイシンとは言いません。精という字は、コマカイという意味やら(精密というでしょう)、スグレタ、ヨリスグッタという意味やら(精鋭、精選)シアゲル、マジリケノナイモノニシアゲル(精白、精米)、イノチ、タマシイ、ココロ(精霊、精魂、精神、精力)やらと、意味するところの多い字です。精ヲ入レル、精ヲ出ス、精イッパイといった言葉には、そんなさまさまな思いが込められているみたい。コマカク、タンネンニ、一点一面をおろそかにせず、そして、正確に、確実に、そしてまた、ココロを入れて、たましいをこめて、ひとすじに、努力する、つとめはげむ、仕上げていく、ということ。

どんなものも、あめつちの生きとし生けるものすべてが、そんな営みを、そんな生きざまをしているみたい。いいえ、していかねければいけないみたい。木ノ精、花ノ精、水ノ精、火ノ精……、いのちの精のみんなみんなが、一切すべてが、精あるものとして、精あるとおりに、精一杯に、精を出しきっていく。精根をつくす。そして進んでいく。精をもって進んでいく。精のままに進んでいく。精進あつてこそ成長がある。精進してこそ、繁栄がある。そういうものでしょう。

進はススム、退カヌコトです。前進です。日進月歩、進行形です。さらさらさらと水の流れてとどこおらぬごとく、常に進行形。わが前に道はないが、わが後に道が出来る、というもの

です。

退かぬ 牛の歩みを みずからの 歩みとなして 進む一進道です。

こうして、精と進と、重ね合せて精進。精進これ仏の道、理想へ向う努力、向上へのつとめ、目的をめざしてのはげみ、精進すなわち人生、と重視される、強調される、ゆえんでしょう。

玉みがかざれば、光なし、と古人は言いました。

金剛石もみがかずば、玉の光は添わざらん、でしたね。

時計の針のたえまなく、めぐるがごとく時のまも、ひかげ惜しみて、はげみなば、いかなる業か、ならざらん というのも、ものの道理でしょう。

秒きざむ時計をいつも手にはめて暮らせども何たる時間の浪費であったのでは、なさないですよ。もったいないですよ。

朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり
とまで古人は強調しています。

やれなかつたのではない。やらなかつたのである
というきびしい指摘もあることです。

まずやること、つとめること、はげむこと、そしてそれも、継続すること、つづけること、不転に、あとずさりすることなく、一足づつでも、一歩づつでも。継続は力なり、です。念ずれば花ひらく、です。目標に向って、めざす理想実現のために、心願を成就しおわるまで。

ご存知の般若心経の末尾の文、「ギャテイ、ギャテイ、ハラギ

ヤテイ、ハラソウギャテイ、ボージソワカ」というのは、実は、この心意気を、心がけを、あり方を、生きざまを、示し教えたものだそうですよ。

はげめよはげめよ、進めよ進めよ、目的に向って、精一杯に、すべての智慧と努力を結集して、総動員させて、目的達成まで、心願成就のあかつきまで、なすとげよ。

そういうはげましの、叱咤勉勵のかけ声なのです。

精進は仏道、まことに、精進こそは、みほとけの示したまうひとすじの道、仏国土に、楽邦土に、到りつくための、ただひたすらの道。

いうところの精進料理なるものも、かくあるための、かくなる人生道のために適切なる、有効なる、ゼイタク三味に流れ得ぬための、簡素にして質実なる、食事の質と量なのだといわんがための、示さんがための、命名なのだ、つつしんで受け取りたいものです。

時は今とこころ足もと このことに うちこむいのち 永遠の
みのち

今はただ このひとことをなさんのみ ひとことのほかに
思うことなし

今を、ここを、この私を、選びとつたひとすじ道を、マイウエイ、マイライフ、この道よりわれを生かす道なし、この道を歩く、その一進道を、その一生涯を、さあ、行こう、歩もう、精進しよう。

(精進〓梵語では、ヴィーリヤ。努力と訳す。)

ながでら しょうえん 勝円寺

下京区仏光寺通河原町西 電話(〇七五)三五二一七八五五
市バス四条河原町下車



文殊の智恵はだれのもの

森鷗外の作品キタ・セクスアリスに、世間の人は性欲の虎を放し飼いにして、どうかすると、その背に騎って、滅亡の谷に墜散る。……中略……羅漢が馴れた虎をそばに寝かして置いている。あの虎は性欲の象徴かも知れない。ただ馴らしてあるだけで、虎の怖るべき威は衰えていないのであると、いう一節がある。文殊菩薩が乗っているのは獅子だから虎というよりライオンに近いかもしれないが、いずれにせよ猛獣であることに変わりない。せいぜい牛や馬や象に乗るなら判るが、そんな百獣の王といわれる物騒な動物に乗るのは、ちよつと穏やかなことでない。人間が近づけばひとたまりもなく噛み殺されてしまう。しかも、それにまたがって行くとはどういうことなのだろう。

鷗外の小説に言うように獅子を性欲に限らず、一般に欲望を象徴するものと考えてもよい。

総ての人間は仏教でいう三毒煩惱のひとつのどん欲から逃れ得ない。欲望はまさに炎のごとく燃え、時としては我身さえも焼き滅ぼしてしまうことがある。肉体の存続するかぎりその火は決して消えることがない。酒や・異性や・金の欲望のため時としては手段を選ばず、どれほどの人々が、あたかも欲望という獅子に噛み殺されているだろうか。その怖るべき獅子の威はそのまま、衰えさせずに馴らしていく、まさにそれが文殊ボサツさまで、文殊の智恵といわれた所以である。

獅子に乗ってみよう

元来お釈迦さまの教えは偶像を礼拝する教えではない筈である。釈尊滅後の仏教徒はお釈迦さまの像すら造ってまつらなかつたのであるから、今日あまたの種類のお像が出来てまつられるようになったが、いずれの仏像も何かを象徴していることにはちがいない。文殊さまも獅子も、それぞれ人の心を表わしている。

仏滅後五百年の間は石に法輪を刻んだり、菩提樹の下でお釈迦さまがお悟りをひらかれたことにちなんで、その木を植えて礼拝の対象にしていた。

そういう意味で、この寺では文殊さまの像を取って他にまつて、文殊さまの乗られる獅子に各自が一度乗ってもらい、自ら文殊菩薩の自覚をしていただき、文殊さまの心境になって戴きたいと願っている。

獅子が人の欲望を象徴するように、文殊菩薩は智恵を表している、俗に文殊の智恵というのがそれである。

仏教は自覚の宗教と言われる。自分の中に尊い仏性を自覚したり救われ難い煩惱を自覚したりするのであるが、いずれもそういう自分を寂かに観てゆくのが、仏教でいう智恵の働きによる。

智恵授く菩薩はいずこ

ながでらの空けし文殊の獅子乗りてみよ

どのようにして文殊の智恵をはたらかせるのか
仏教の究極するところは、智恵(仏智)を得ることである。

如何にして、欲望の獅子に噛まれずに、而もその獅子の威を衰

えさせずに馴らしてゆくか、そういう智恵がはたらくようになるために、仏教の修行として座禪、唱題、称名、など色々あるのだろうが、浄土宗では法然上人の教えにより口でナムアミダブツとお念仏を称える中に、その智恵がはたらくようになること、教えている。

よく知られている般若心経の般若はインドの古い言葉のパンニヤを漢音に音写したもので、その意味は智恵ということに訳される。智恵は書物やテレビで知ったり学習して働き出すものではない。たとえてみると、平素なにげなくしていることであるが、数億の人の中から、知人を一瞬にして、判別するようなことは選び方を習ったうえで、することでないが大変なことをしているのである。

そのように習って働きますものではないが、自分の中で、深く自分を見てゆく働きをするのが智恵である。

欲望や怒りで暴れ狂う獅子のような自分を静かに凝視してゆくもの、酒に酔いしれている肉体を酔いもせず正視している、そういうものが、般若といわれる智恵であるのだが、それならそういう智恵を如何にして働かせるのか。



おみやげ

南無帰依仏

紫雲山
こん かい こう みょう じ
金戒光明寺
 重文・文殊堂
 左京区黒谷町
 ☎ (075) 771-2204

市バス
 岡崎道又は東天王町下車

南無帰依法

聖衆来迎山 総本山
えい かん どう ぜん りん じ
永観堂禅林寺
 左京区永観堂町48
 ☎ (075) 761-0007・771-2448

市バス ⑤ ⑲
 永観堂前下車

南無帰依僧

清泰山
だいもん じ であら
大文字寺浄土院
 左京区銀閣寺町30
 ☎ (075) 771-5158

市バス
 銀閣寺道下車東へ

こん かい こう みょう じ
金戒光明寺

絵馬・絵ハガキ

えい かん どう ぜん りん じ
永観堂禅林寺

し お り

だいもん じ であら じょう ど いん
大文字寺浄土院

念珠・小冊子等

あかもん しょう ぶく じ
あかもん養福寺

絵馬・〈当面はピッパラ〉

こまち であら ぶ だ ら く じ
こまちでら補陀洛寺

腰下げ(仕合せ貝)

じき し あん
直指庵

絵はがき及び六道のしおり

あ み だ じ
阿弥陀寺

精進護符

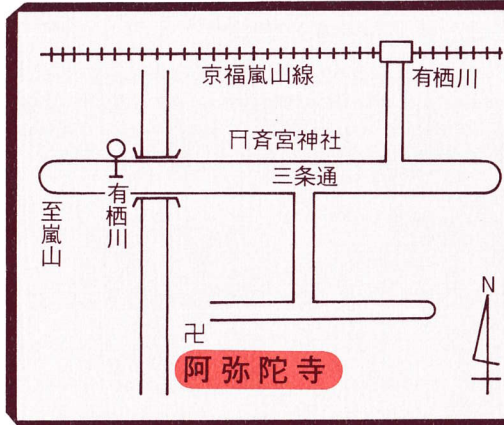
やす い ねん ぶつ じ
安井念仏寺

貝腰下げ

なが であら しょう えん じ
ながでら勝円寺

冊子・カレンダー

- 京都文殊霊場掛軸 ¥7,000— 朱印 ¥300—
- 京都文殊霊場伝巻 ¥1,500— 朱印 ¥200—
- 文殊さまの御札 ¥300—
- 智恵の九曜星色会せ 台紙 ¥1,000— シール ¥100—
- 京都文殊霊場色紙 ¥1,000—
- 文殊梵字サシコ ¥1,000—

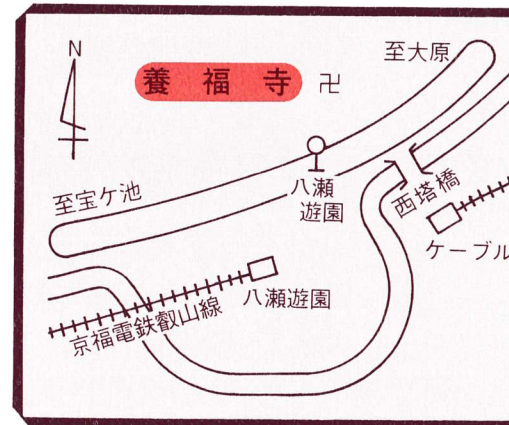


精進波羅蜜

如意山
あ み だ じ
阿 弥 陀 寺

右京区嵯峨野宮ノ元町76
☎(075)881-2316

- 京福電車
- 市バス 有栖川下車
- 京都バス

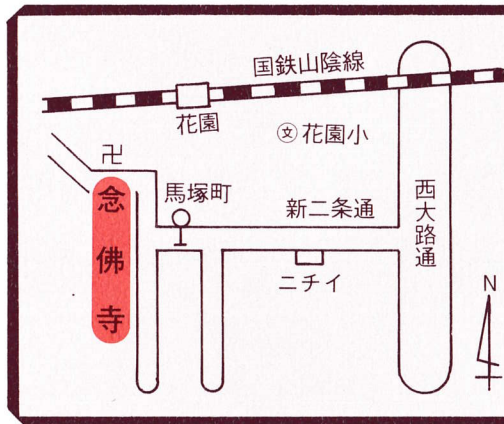


布施波羅蜜

告駱山
よう ふく じ
あかもん **養 福 寺**

左京区八瀬野瀬町48
☎(075)721-8575(代)

- 京福電車
- 市バス 八瀬遊園下車
- 京都バス

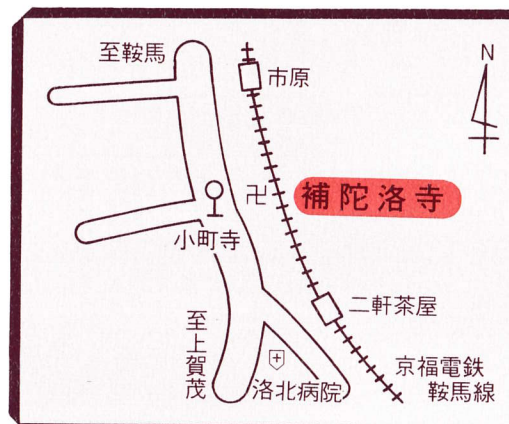


禪定波羅蜜

法雲山
やす い ねん ぶつ じ
安 井 念 仏 寺

右京区太秦安井北御所町
☎(075)821-5550

- 市バス 27
- 馬塚町終点下車

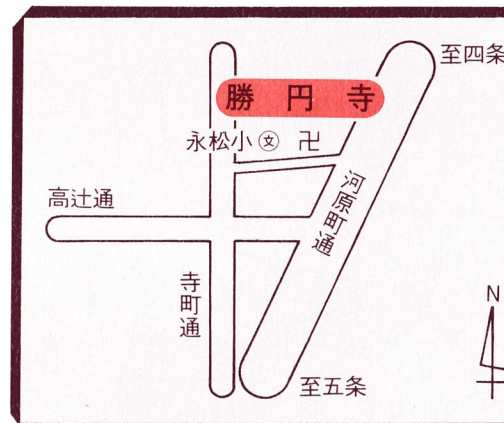


持戒波羅蜜

如意山
ふ だ ら く じ
小町寺 **補 陀 洛 寺**

左京区静市市原1140
☎(075)741-3285
741-3662

- 京都バス 静原・市原行き
- 小町寺前下車

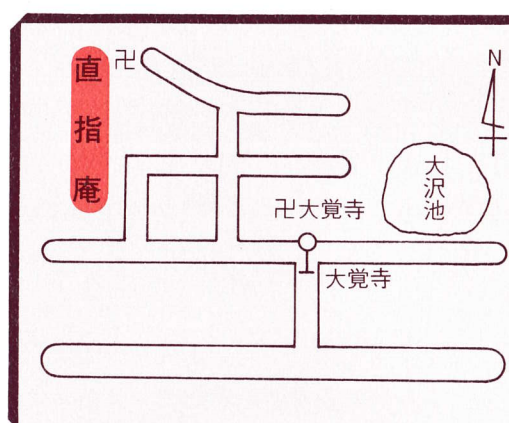


智恵波羅蜜

大悲山
しょう えん じ
ながでら **勝 円 寺**

下京区仏光寺通河原町西
☎(075)351-7855

- 市バス
- 四条河原町下車



忍辱波羅蜜

祥鳳山
じき し あん
直 指 庵

右京区北嵯峨北ノ段
☎(075)871-1880

- 市バス
- 京都バス 大覚寺下車

あとがき

昨年三重の近畿ツーリスト社が京都文殊霊場めぐりを募集しておとずれて頂いたのが好評だと言うことで、日帰りでは全部を廻りきれない為、一泊旅行で全部を廻るプランで募集したので、その参考になる資料を。との要望があり、パンフレットを送り、小グループにはキャラバン（九人乗り）タクシーの斡旋もさせて頂くと、更には誘いへの勧奨の為に、夫々の寺でどの様な接点を持つかを、レジメを示せば利用に便利なのではと「文殊霊場への誘い」とそのものズバリの小冊子を作ろうとしたが、多忙なのか、仲々皆さんからの原稿が頂けず一年以上の遅延となったが、やっとそれらしいものが整ったので印刷することにします。

意図するところとまだへだたりの感なきにしもあらずだが、次の機会に期待するところ大にして、出すものであります。

これが参考となり、誘いになれば幸せとするところであります。

(S 60・8月)

文殊菩薩とは……？

よく知られているのに、もとの意味がわからないまま使われていることわざのひとつに、「三人寄れば文殊の智慧」というのがあります。「智慧の仏さま」と信仰され、崇敬されてきました。獅子に乗った御姿で、釈尊の左におられます。右の白象に乗った慈悲を表わす普賢菩薩と共に釈迦三尊としてお祀りされておられます。

華嚴経の中に、さまざまな人とめぐりあい、その人生訓を訪ね歩いた善財童子の話がありますが、童子が最初に出会ったのがこの文殊菩薩でした。その教えに従い、人生求道の旅を続けた童子は五十三人目の時、目的を達成したと言われています。(東海道五十三次道中スゴロクの名の由来)。

文殊菩薩の縁日は毎月二十五日とされていて、天神さまと同様に学問、智慧を授けて下さる仏さまと信仰されています。

